

- ・ ソーシャル・メディアの新しい可能性を感じた。情報の流れを可視化すること、どこで何が話題となり、どう広がるかが分かることでトレンドを作ることができる、トレンドを予測できる、そういった情報が集まることへの力強さを感じ、世界を動かす可能性を感じた。ツイートを可視化した映像がとても印象に残った。個人の発信力が高まることで社会へのインパクトがあるような行動をすることが可能となり、問題解決につながる点が、自分たちのアクション・プランを考える上でも使えるのではないかと感じた。

日付	2011年7月28日(木)
講師	国際連合児童基金 (UNICEF) 東京事務所代表 平林 国彦
カテゴリー	政府・政府機関
主なテーマ	Polio Eradication and UNICEF's role
概要	<p>解決すべき課題が様々あるなかで、「なぜポリオなのか?」「なぜポリオは根絶されるべきなのか?」という問いから本講義が始まった。参加者はまず「なぜこの課題に挑もうとしているのか」「根絶によりどのようなアウトカムがあるのか」について考え、続いて、ポリオの現状・ウィルスのタイプ・感染経路・症状・予防方法・ワクチン接種等について、UNICEFのポリオに対する取り組みと合わせて学んだ。</p> <p>日本については、ワクチン接種が2回と世界標準の3回に比べて少なく、国際社会から見れば完全に安全とは言い難い状況で、人の移動と共に感染拡大するポリオウィルスについて注意が必要である。一度撲滅された中国も、今年になって感染が確認されている。</p> <p>平林氏は、最後に、公衆衛生においては、いかに資金を効率よく使用し、多くの人を救うか、という視点で考えることが多いが、一人ひとりを幸せにする、という思いやりを持つことも大事にしてほしい、と強調した。</p>
目的及び意味合い	<p>本講義は、第二講義として、臨床医として活躍されていた平林氏により、ポリオウィルスのタイプ・予防方法・感染経路などの基礎知識、また現勤務先である国際機関ユニセフが、これまでどのような戦略でポリオ撲滅に対応してきたか、日本と異なってポリオ蔓延地域はどのような環境にあるかなど、総体的にポリオを学ぶことを目的とした。この講義により、ポリオ撲滅の必要性や現課題をしっかりと参加者は共有することができた。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> 「ポリオは撲滅されなくては行けないか。」という先生からの問いは不意打ちであった。世界にはもっと死亡率の高い健康課題があり、ポリオの死亡率は高いとは言えず、むしろ低いと言える。MDGs4、5に挙げられているように5歳以下の乳幼児死亡率や妊産婦死亡率、下痢、肺炎、HIV/AIDSによる小児の死亡率ははるかに高く、また死亡者数が多いのが現状である。しかし、ポリオウィルスに感染し200分の1で発祥した場合、麻痺が残るという現実がある。一人でもそのような人がいる限り、その健康課題に取り組むべきであるという正義と、数は少ないからそれよりも多くの方が死亡する健康課題を優先した方がよいという健康公共政策のせめぎ合いがグローバルヘルスの力関係を左右しているということを実感した。しかし、どんなときにも一人の命の重さはみな同じであり、救うべき命、病から守るべき命を助けるという共通の目標に向かっていることを忘れてはいけないと思った。

- ・ 「政策」というものを立案・実行するにあたって、限られたリソースを配分することになる以上、誰かを助けることはだれかを見捨てることと表裏になることもあり、政策立案者は相応の哲学と覚悟を持ち合わせる必要があるということを実感した。また、マクロな視点とミクロな視点は常に持ち続けていたいものだと改めて思った。

日付	2011年7月28日(木)
講師	外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官 金森 サヤ子
カテゴリー	政府・政府機関
主なテーマ	我が国の国際保健政策課題への貢献
概要	<p>本講義では、DAH(Development Assistance for Health)とODA(Official Development Assistance)を様々な角度から考察し、グローバルヘルスの過去20年の潮流および日本のグローバルヘルスへの貢献について学んだ。</p> <p>90年代からDHAの総額は増えており、特にゲイツ財団や他NGOからの支援増加が目立つ。各国の支援金額は総じて年々増加傾向にあるが、日本は横ばいから減少傾向にある。</p> <p>2000年にミレニアム開発目標(MDGs)が設定され、2015年までに達成すべき8つの目標が明確化されたものの、目標の達成は依然として厳しい状況であり、更なる取り組みが欠かせない。グローバルヘルスへの貢献が外交手段としても重要な役割を担う中、日本のグローバルヘルス政策の強化および国際的に活躍できる人材の育成・輩出の重要性についてディスカッションを行った。</p>
目的及び意味合い	<p>本講義は、外交政策の立案、外国政府との交渉、国際機関等への参加・協力等を担い、グローバルヘルス分野においても、政府機関として大きく関与している外務省が、グローバルヘルスのトレンドをどのように捉え、日本としてこの分野でどのような政策を展開しているのか把握する目的で行った。これにより、参加者は、これまでの外務省の取り組みから日本の抱える現状と課題を認識する機会を得た。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ グローバルヘルスは外交問題であり、健康課題を解決するためには、資源(人的、金銭的)が必要であることも事実である。すると国々の関係やODAの援助額、援助方法など様々な側面において、世界の中でいかに立ち回っていくかということが重要になり、目の前のマラリアに感染した患者やエイズ患者はどこかにいってしまっているのではないかと考える部分もある。その点、Gates FoundationやGAVIといったプライベートセクターの援助方法はとても効果的、効率的であり、だからこそパワーをもっている。資金面においてODAの援助額が年々減少しG8の中でも日本のプレゼンスが下がる中で、日本がグローバルヘルスにおいてできることは他にもあるのではないかと考える。母子手帳を創り、産前産後の管理を飛躍的に改善したように、コミュニティを単位とした活動のもとに保健衛生が成り立つ日本ならではのポリオ撲滅の方法があるのではないと思う。

日付	2011年7月29日(金)
講師	日本医療政策機構 代表理事 黒川 清
カテゴリー	NGO/NPO
主なテーマ	国際保健の潮流
講義概要	<p>「incunabula」という言葉から始まった本講義は、15世紀のグーテンベルグの印刷革命、および最近の中東のツイッター革命を取り上げ、情報の広がりがいかに大きな力を持ち得るかを考えた。</p> <p>情報が瞬時に世界中に広がる今、3.11に発生した東日本大震災への対応をめぐっては、日本人の素晴らしさが称賛された一方で、日本の「組織」の弱さや欠陥・悪弊などが世界中に露呈する結果となった。</p> <p>政治・経済が一つにつながるグローバルな世の中で、我々は「関係無い」とは言わず、グローバルヘルスをはじめとした、地球上の重要な課題を共に解決していかなくてはならない。</p> <p>これからの日本には、組織の枠にとらわれず、グローバルに活躍できる個人が必要である。黒川氏は、世界を舞台に活躍することを目指す受講生に向けて、学生のうちに海外に行き、知識や経験を積むこと、実践・行動力の重要性を語り、講義を締めくくった。</p>
講義目的及び意味合い	<p>本講義は、グローバルヘルスを含め世界の諸問題に取り組むにあたり、日本という枠にとらわれず、若いうちから世界に目を向けることの重要性を参加者が理解することを目的に行った。また、分野を超えてグローバルに活躍する黒川氏の講義により、参加者への刺激を与え、物事を多角的に見つめる機会とした。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今の日本社会の問題の構造やグローバル社会が情報拡散のパワーで激しく変化しやすいものになっていることが分かった。日本がリスクをとらない保守的なエスタブリッシュメントのためにそのような世界の変化についていけなくなり、国際社会の中で存在感がなくなっていっているのが現状ではないかと考えるが、そうした日本の現状を変えていくにはグローバルな感覚をもって日本を外からとらえ、さらに目の前の問題を、現在だけではなく、過去や未来ともつなげてとらえる感性が必要なのだと思う。物事を、時間軸を長くとって考えることや、海外経験をつんで、世界との関わりの中で日本を相対化する感覚を持つことができるようになりたいと思う。 ・ 黒川先生からは、非常に広い視点から多くのことを学ばせていただいた。中でも日本の現状、俯瞰的な視点を持つことの大切さ、サッカーのようなチームプレーを目指すことの3点が心に響いている。これらを総合的に捉えても、海外へ留学することは今の自分にとって重要なステッ

プになると確信致した。黒川先生のような世界を引っ張るリーダーに近づけるよう、精進したい。

- ・ 若い世代が提言・実行していかない限り、上世代に有利な現在の社会システムでは結果的に不利益を被るのは現在の 20 代以下の世代という厳しい現実を突きつけられたと思う。いかに日本が危機的状況にあるとはいえ、日本の官公庁、大企業、大学で実験を握るエスタブリッシュメント層を崩す手立ては黒川先生にも容易に思いつけるものではない、という感覚が言葉の節々に感じられた。自分自身にも何かいいアイデアがあるわけでもないし、正直なところ、この苦境の中をどう生き延びるか、という課題意識しか持ち得ない。しかし、もし将来自分にもきちんとした実力と社会へ働きかけられる機会が得られたときには、黒川先生のお話が拠り所になると思う。

日付	2011年7月29日(金)
講師	ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト 山崎 繭加
カテゴリー	アカデミア
主なテーマ	問題解決の基本とコミュニケーション
概要	<p>1. 問題解決の基本技についての説明の後、参加者は各班に分かれて演習を通じ、問題解決の手法を学んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ MECE (相互に排反しているが、それらの総和は世の中のすべてを包括するような要素の集団) ・ ロジックツリー (概念を MECE に分解し、階層ごとに整理・組み立てたもの) ・ イシューツリー (概念ではなく、イシュー (課題文) を、MECE な階層のツリーで分解したもの) ・ フレームワーク (3C、ビジネスシステム、7S など) <p>2. 考え方の基本の流れ</p> <ol style="list-style-type: none"> ① プラン <ul style="list-style-type: none"> ● イシューへの分解 ② リサーチ <ul style="list-style-type: none"> ● 事実や数字 ● 全体像の把握 ③ 分析 <ul style="list-style-type: none"> ● 仮説 ④ まとめ・ストーリーライン作成 <ul style="list-style-type: none"> ● フレームワーク
目的及び意味合い	<p>本講義は、アクション・プラン作成に向けての思考プロセスを学ぶ目的で、プログラムの初日に行った。グループワークで演習問題に取り組み、参加者は、課題分析、現状理解、打ち手の検討、提言・実行戦略の一連のプロセスを経て、課題の捉え方、解決手法を学んだ。その後の9日間のプログラム中、参加者はアクション・プラン作成に向けてのディスカッションの際には、MECE、フレームワークに立ち返り、ロジックに基づいた視点からの議論を試みた。等講義を初日に行ったことが参加者の思考プロセスの基礎を固める上で重要であった。</p>

学生からのコメント

- ・ 考えるということの複雑さについて考えさせられた。ロジカルシンキングの本はたくさんあるが、疑問に思ったことをその場で聞け、実際の演習を通じて理解を深められ、本では学べないよい経験ができた。今後の実践を通じて問題解決の手法を自分のものにしていきたい。講義の本質からずれませんが、感情を切り離して私的な意思決定を客観的に評価できると考える点は、自分と異なり興味深いと思いました。
- ・ MECE の概念が非常に斬新であった。数学的に包含関係に陥らない集合を並列し、事象を演繹的に（勘やひらめきに頼らず）把握していくプロセスに魅力を感じた。講義内で実践的なワークショップがあり、よりその効果を体感することができた。MECE を実践する場数（経験値）を自分自身で自分に果たしたいと思う。

日付	2011年7月29日(金)
講師	ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト 山崎 繭加
カテゴリー	アカデミア
主なテーマ	プレゼンテーション・インタビュー
講義概要	<p>1. ストーリーライン(下記①と②の繰り返しで精度を上げる)</p> <p>① データ、インタビュー、分析、チーム議論など</p> <p>② 基本のストーリー</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 現状把握 ● 課題の整理、全体像 ● 解決策の提示 ● 提案・まとめ <p>2. インタビュー</p> <p>① 検討：知りたいことを整理、全体像の理解、インタビューイの選定</p> <p>② コンタクト：レター・資料の作成、コンタクト</p> <p>③ 事前準備：情報収集、質問リスト</p> <p>④ インタビュー：自己紹介・趣旨、美しいメモ、感謝を伝える</p> <p>⑤ インタビュー後：お礼の手紙(メール)、インタビューノートの作成</p>
講義目的及び意味合い	<p>プログラム最終日の報告会に向けたプレゼンテーションスキルの習得を目的とした本講義では、日本のグローバルヘルス政策に関する現状と課題について短時間にまとめ、発表するというグループ演習が行われた。参加者は、プレゼンテーションの組み立て、スライドの作り方、発表方法等の基本スキルを学んだ。インタビューの方法についても学んだ後、「伝えたい気持ちや感謝の気持ちが大事」というかたちで本講義は締めくくられ、参加者は単なるスキルにとどまらないコミュニケーションのあり方について学んだ。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大変わかりやすい講義であった。講師自身のプレゼンテーション方法、ふるまい、話し方など大変参考になった。 ・ プレゼンテーションについての新たな発見は、プレゼンテーションの成功、不成功は発表する前から既に決まっているということである。つまり、プレゼンテーションを行う内容について事前にどれだけ深く考え、検討したかによって成功、不成功が決定するということである。話が得意、不得意とプレゼンテーションの成功とは関係がないと言ってもストーリーの流れは、誰が見てもわかるような展開、例えば現状→課題→解

決策といったような流れに設定するのがよいということが分かった。パワーポイントは、シンプルでインパクトを持たせることが大切で、一つのスライドで一つのメッセージを伝えるようにするのが効果的であることが分かった。

日付	2011年7月29日(金)
講師	自治医科大学教授 尾身 茂
カテゴリー	アカデミア
主なテーマ	ポリオ撲滅に向けた取組み
講義概要	<p>本講義では、尾身氏がWHOにて、西太平洋地域のポリオ根絶に携わった経験を中心に、ポリオ根絶までの困難ややりがい、また将来グローバルに活躍することを目指す参加者へ向けて、キャリアアドバイスをを行った。</p> <p>ポリオ根絶に向けては、大規模なサーベイランスの実施、継続的な資金獲得の試み、ワクチン接種をめぐっての各国の保健大臣との折衝など、尾身氏の実験の経験を踏まえた話をされた。</p> <p>最後に、優れたリーダーになるには、社会に対する高い意識をもち、物事を総合的に捉え、正しいことをする決断力が大切であるということ、また、自分の感情をコントロールできるようになることだと強調された。</p>
講義目的及び意味合い	<p>本講義は、実際にポリオ根絶を西太平洋地域にて達成した尾身氏よりその経験を伺うことで、アクション・プラン作成へのヒントを得る機会を目的に行った。講義の中では、根絶に携わったご苦勞の他、尾身氏自身がWHOで勤務されるまでの経緯なども踏まえ、参加者たちに若いうちに身につけるべきことや鍛えておくべきことをアドバイスされ、講義を締めくくった。多くのアドバイスは、キャリアや将来のことに悩む参加者への力強いメッセージとなった。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ リーダー論を熱く語っていたのが印象として強く、自分自身、人の話をこんなに真剣に聞いたことは無かったし、尾身先生の経験から出た実感のある言葉に聞き入ってしまいました。リーダーは孤独である、人付き合いを超えて、志を持って、総合的に判断する強さが必要だと感じた。ただ生きるだけでは弱さが出てしまう、そのために早いうちにいい習慣を身につけるなど、自分の甘い点を反省しなければと思った。人間はどうあるべきか、論語、聖書を読むことにたどりつくような深い思索、自分の志を持つこと、そして好きな仕事を生き生きとされている姿を見て自分もあのレベルの人間力を身につけたいと感じた。 ・ 尾身さんの講義を通して、自分の中で不安に思っていたことや、確信が持てていなかったことなどが、とてもすっきりしたように感じた。例えば、春から社会人になるにあたって、待ち受ける様々な困難や苦勞に自分が耐えられるのか不安がややあったが、人間は不自由さの中でこそ充実感を得るというお話を聞いて、何とか頑張れる気がした。

日付	2011年7月30日(土)
講師	株式会社キャンサーズキャン 石川 善樹
カテゴリー	企業
主なテーマ	「変わらない」を、変えていく — ソーシャルマーケティング思考のすすめ —
講義概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. ソーシャルマーケティングについて 民間企業で培われてきたマーケティングの手法を、社会問題解決に活用すること。 2. ソーシャルマーケティングの手順 <ol style="list-style-type: none"> ① エビデンスのレビュー ② マーケティングリサーチ ③ 評価デザインの設計 ④ 介入の実施 ⑤ モニタリング・評価 ⑥ 成果の公表 <p>実例：乳がん検診率アップ、映像シナリオ、タバコキャンペーン等</p> 3. ポリオ撲滅のキャンペーンをするにあたり ポリオというネガティブかつ非日常なテーマから離れ、ポジティブに、身近な問題として共感を呼ぶストーリーを考えだしては、という提案を行った。
講義目的及び意味合い	<p>本講義は、マーケティングの手法を社会問題解決に活用する、ソーシャルマーケティングについての理解を深めることを目的として行われた。</p> <p>クイズや映像、実例を多用しての石川氏の講義は、講義のプレゼンテーション自体が参加者の心を捉えた様子であった。戦略を立てるだけでなく、その戦略をいかに表現するかが大事である、という講義全体を通じてのメッセージに、参加者は、受け手の立場に立ち、共感を生む表現の重要性を認識した様子であった。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 深層心理に訴えかけるということは日常生活にも幅広く応用することができ、また、常に相手の深層心理を考えながらコミュニケーションをとることは、相手のことを理解し、良い人間関係を築くことに大きな役割を話すのではないかと考える。また、人の行動や習慣を変容させようとするときには、十分に相手の深層心理に訴える必要があり、そのためには、その相手のことを理解するべく観察をしっかり行うことが重要である。私は広告やCMを見て心を動かされたり、実際に行動してしまったりすることが多いのだが、心に響く広告をつくるために、こんなに深く考え抜かれ、検討されていたのだということを知ってとても驚いた。

- ・ やはり映像で伝えるメッセージは強く印象に残った。マーケティングは楽しいと感じた。どう人を動かすか、深層心理を読み取って、そこに訴えるメッセージを出すことを学んだ。また、心を動かすことも大切なポイントであると思った。社会で生きる上で感性は非常に大事にしなければいけないと思った。感性とは、コミュニケーション能力や共感能力など互いが良い影響を与えあって生きるのに重要なスキルではないかと感じた。
- ・ ソーシャルマーケティングの思考が斬新であった。必ずしも内容を詳しくすることが、有用な戦略ではないことを、ワークショップを通じて体感させられた。情報に優先順位をつけ、かつ、相手のインサイトや琴線に触れる工夫が必要であることを感じた。

日付	2011年7月30日(土)
講師	東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 教授 渋谷 健司
カテゴリー	アカデミア
主なテーマ	グローバルヘルス政策
講義概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. グローバルヘルスの諸問題 ポリオ根絶は最優先の課題か？ 限られた資金をどう配分するか？ ポリオは、MDGsにも含まれず、NCDというトレンドも出てきた。 ← 根絶は今後かかる費用の現状につながる。 実現可能性が高い。Victoryの意識につながる。 援助疲れしないために達成は必要。 2. 誰がグローバルヘルスを担っているか H8: WHO、ユニセフ、国連人口基金、世界銀行、UNAIDS、世界基金、GAVI アライアンス、ゲイツ財団 →民間の台頭・WHOの凋落 3. 日本の対応 国際機関の幹部人事での存在感無し グローバルヘルスでの戦略を考えることが必要 リーダーシップをとることのできる人材育成が必要
講義目的及び意味合い	<p>本講義は、世界が注目するグローバルヘルス課題の現状、プレーヤーおよび、日本の当課題への対応について学ぶ目的で行った。</p> <p>グローバル社会に生きる今、グローバルヘルスという地球規模課題に対し、日本がどのように貢献をしていくかは、政治・経済問題として重要であり、日本のグローバルヘルス政策強化の必要性の説明を行った。</p> <p>今回のテーマであったポリオが最優先の課題か、ということについては、データを見ながらグローバルヘルスの現状を定量的に把握し、エビデンスに基づいた議論を展開することの重要性が強調された。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 率直な物言いが大変印象深かった。日本の外交戦略が話題になる中で、「日本のために」働く義務が自分にあるのか考えさせられた。日本について考える唯一の理由は、自分の関心対象である国際保健の課題を解決する手段として、日本を巻き込むことが有効であるからであることを確認できた。 ・ ポリオ撲滅事業は本当に最重要課題なのか？なぜ国際機関における日本人職員は少ないのか？などの疑問点から、グローバルヘルスでの世界の物事のルールみたいなものを教わった。

日付	2011年7月30日(土)
講師	世界の子どもにワクチンを 日本委員会 新井 俊郎、窪田 順子
カテゴリー	NGO/NPO
主なテーマ	ワクチンを通じたグローバルヘルス課題へのJCVの取組み
講義概要	<ul style="list-style-type: none"> ● JCV 設立の経緯 ● 支援先の現地視察について ● 寄付方法の模索：「僕のルール」、ペットボトルキャップ等の回収 <p>途上国には様々な問題があるが、長期にわたる対応が必要であり、「細く・長く」継続的な支援が必要である。また、現地のニーズを把握することが重要。日本は寄付文化がまだ定着していないが、徐々に変化しつつある。</p>
講義目的及び意味合い	<p>本講義では、感染症の感染予防を目指し、募金活動や社会啓発により、途上国へのワクチン支援を行っている、「世界の子どもにワクチンを (JCV)」の活動展開を通じ、日本の国際保健 NGO の現状と課題について学ぶ目的で行った。福岡ソフトバンクホークスの和田毅投手が始めた「僕のルール」や、企業との連携を通じた募金活動が紹介され、「社会に対して何かしたい」と考える一般の人が、気軽に参加できる仕組み作りの重要性について考えることができた。日本の多くの NGO がおかれた厳しい運営状況など、課題はあるものの、変わりつつある日本の寄付文化をとらえ、今後の更なる活動展開が期待される。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「寄付」という手段が、パラダイムが変化する過程が一人の人間によって引き起こされ、それが日本全体を覆う動きになっている、そのダイナミズムが生々しく、面白かった。今後の日本における NGO、NPO の発展の鍵ともなる考え方であると思う。こういった「三方良し」の枠組みが作れると、どんどん世界は良くなると思う。 ・ 外部からの助成金に頼らず、個人からの寄付でのみ活動している点が素晴らしいと思った。また、恐らく金額にすると大きくはないであろう中で、他ドナーと有効な協力関係を築いている点、ファンディング等の工夫が見られ、参考になった。

日付	2011年7月30日(土)
講師	世界保健機関(WHO)ポリオ撲滅イニシアティブ 医官 岡安 裕正
カテゴリー	政府・政府機関
主なテーマ	Global Polio Eradication Initiative
概要	<p>現在ジュネーブのWHOに勤務する岡安氏と、初の試みとしてビデオ会議形式で講義を行って頂いた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ポリオとは・ポリオの歴史 2. ポリオ撲滅計画 <ul style="list-style-type: none"> ● Routine Immunization ● Surveillance ● Immunization Days ● Mop-ups 3. ポリオが残る地域の特徴(4カ国)と現在の状況 特徴：紛争地域、高い人口密度、悪い衛生状況、ヘルスシステムのインフラが未発達、自然災害・治安 状況：インドー順調、半年間報告無し、ナイジェリアー順調、パキスタン・アフガニスタンー今後の対策複雑、早期対応必要 4. 根絶に向けて <ol style="list-style-type: none"> ① 新型ワクチンの研究開発 ② 疫学調査 5. 日本の役割 日本はこれまでポリオ対策に多額の財政支援や技術開発支援を行ってきたが、今後は、より積極的にイニシアティブをとり、他国と協力して、撲滅に向けた最後の1インチを推し進めることが必要ではないか、との意見が出された。
目的及び意味合い	ポリオ撲滅に向け、WHOがこれまでどのような対策をしてきたか、今後必要となる取り組みは何か、日本に期待される役割とは何か、を何う目的で行った。現在進行形でこの問題に取り組む岡安氏の講義は、ビデオ会議によるジュネーブのWHOと繋がっているということもあって、参加者はよりリアルに聞くことができた。
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 印・パ・アフガニスタン・ナイジェリアというポリオ常在国はそれぞれに政治・経済状況・文化等が当然のことながら異なることから、各国のポリオ撲滅のキーを国の概況をふまえておさえることが必要であることを学んだ。また、ポリオ撲滅にかけられるリソースは限られていることから、どこの国にどれだけの重点を置くのかという選択と集中を、その結果生じると考えられるメリットの大きさも比較しながら

検討する必要があると考える。“ポリオ撲滅”の利点を政治・経済・外交にまで枠を広げて大きな文脈でとらえることの重要性を認識した。

- ・ ポリオ撲滅に関するこれまでの経緯や国別の詳細など現実に即した内容を聞くことができた。国別だけではなく、国内においてもターゲット地域を絞った戦略が必要であり、effective で efficient なプランを実施し、アウトカムが見えることが重要である。
- ・ ポリオ撲滅に対する最新かつ膨大な情報が盛り込まれており、大変興味深かった。ポリオ撲滅対策の大枠のパッケージから、さらに中に踏み込んだ国別の対策が必要であること、99%のポリオ対策と1%のポリオ対策はことなることなどが大変参考になった。今後のアクション・プランを作成する中で、どのようなことを考える必要があるか、クリアになった。

日付	2011年7月31日(日)
講師	エーザイ株式会社 グローバルパートナーソリューションズ ディレクター スリングスピー B.T.
カテゴリー	企業
主なテーマ	Access to Medicines
概要	<p>世界中には、効果的な治療法が存在するにもかかわらず、貧困や医療システムの不備などから、必要な医薬品が入手できない人が多く存在する。医薬品アクセスを改善するには、単に医薬品を供給するだけでなく、それぞれの地域の医療ニーズの見直し、イノベーションの創出および継続的な医療提供が必要である。中長期的観点に基づいた、企業と途上国パートナー機関・団体の双方に価値のある、新しいビジネスモデルの可能性についてディスカッションを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● アクセスの構造=Affordability・Availability・Adoption ● エーザイの戦略とポリシー 持続可能な解決法→Human Health Care for the World ● エーザイのアプローチ <ul style="list-style-type: none"> ① プロダクトクリエーション ② 戦略的ソリューション ③ キャパシティビルディング ④ クオリティイノベーション ⑤ 長期的投資
目的及び意味合い	<p>英語で行われた本講義は、製薬会社の立場から、医薬品アクセスの不公平について、現状どのように考えているか、また将来的にどのような対応を検討しているかなどを理解する目的で行った。</p> <p>エーザイの医薬品アクセスの改善に向けた取組みを通じ、社会的課題に対して企業が市場をベースとしてどのように貢献できるかについて考察した。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国際保健分野におけるビジネスの可能性を指摘されていた。今まではビジネスは主流では無かったが、日本のODAの削減などを考えると、ビジネスは今後とても重要なプレーヤーになってくると思う。政策提言に活かさないか考えたい。 ・ Access To Medicine という一見受療者の権利や利益のみに焦点をあてているように見える概念でも、提供者(製薬会社)側の利益をふまえることで、win-winの関係を構築することが可能だということを学んだ。製薬会社にとってはCSRと将来のマーケットを見つける・作るという意味で途上国(middle-income)で活動することにも意義がある。その

ような相手の利益を探る思考は相手のアクションを引き起こす前提であると思った。また、途上国の人々が医薬品にアクセスできるようになるには adoption が重要であるという点は、ハード面がいくら整っても人の心というソフト面が整わなければ意味がないという人の行動心理をそのまま表していると思う。現地の人たちの考え方や文化といったものを把握し、その中で adoption の方法を考えることが重要であると考ええる。

キャリアフォーラム

実施目的	グローバルな活躍をしている多様なキャリア体験者とプログラム参加者の直接的な交流機会を創出することで、グローバルヘルス分野での人材養成に関して、参加者が定性的情報を獲得することを目的として、キャリアフォーラムと称して、セッションを2つ設けた。
実施方法	<p>■ 日時：</p> <p>キャリアフォーラム 1 2011年8月3日（水）18:45-20:00</p> <p>キャリアフォーラム 2 2011年8月5日（金）11:30-12:30</p> <p>■ 会場：東京大学大学院医学系研究科 3号館1階 N101号室</p> <p>キャリアフォーラム 1： サマープログラムの開催場所である教室を使用し、コの字型からシアター形式に椅子を並べ変え、通常の講義とは異なるカジュアルな雰囲気のもと、参加者とパネリストが気軽に対話できる形式にした。</p> <p>キャリアフォーラム 2： 同教室を使用。班ごとにランチを頂きながら、こちらもカジュアルな雰囲気での講義を行った。</p> <p>■ パネリスト（敬称略）：</p> <p>キャリアフォーラム 1</p> <p>NGO/NPO</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小暮 真久 TABLE FOR TWO International 理事・事務局長 ・ 坪内 南 一般財団法人 教育支援グローバル基金 理事・事務局長 <p>キャリアフォーラム 2</p> <p>政府・政府機関</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 森 秀樹 世界銀行 緊急社会対策プログラム担当マネージャー <p>■ 実施体系</p> <ul style="list-style-type: none"> ● キャリアフォーラム 1 ～「世界を変える」を仕事にする～ 参加者たちが、社会貢献を目指し、グローバルに活躍している2名の先輩の体験談を聴き、国際的なキャリアパスを描く際の心構え、参考情報およびネットワークを得る機会を創出することを目的とし実施した。 ● キャリアフォーラム 2 ～途上国で貧困世帯を守る～ 1に続き、開発分野で国際的に活躍するスペシャリストの体験談を聴き、仕事内容、キャリアについてアドバイスを得る場を設けた。
概要	<p>■ プログラム</p> <p><キャリアフォーラム 1></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 小暮真久氏 世界の約70億人のうち、10億人が飢えに喘ぐ一方で、10億人が肥満など食に起因する生活習慣病に苦しんでいる。この食の不均衡の同時解決を目指して活動し